

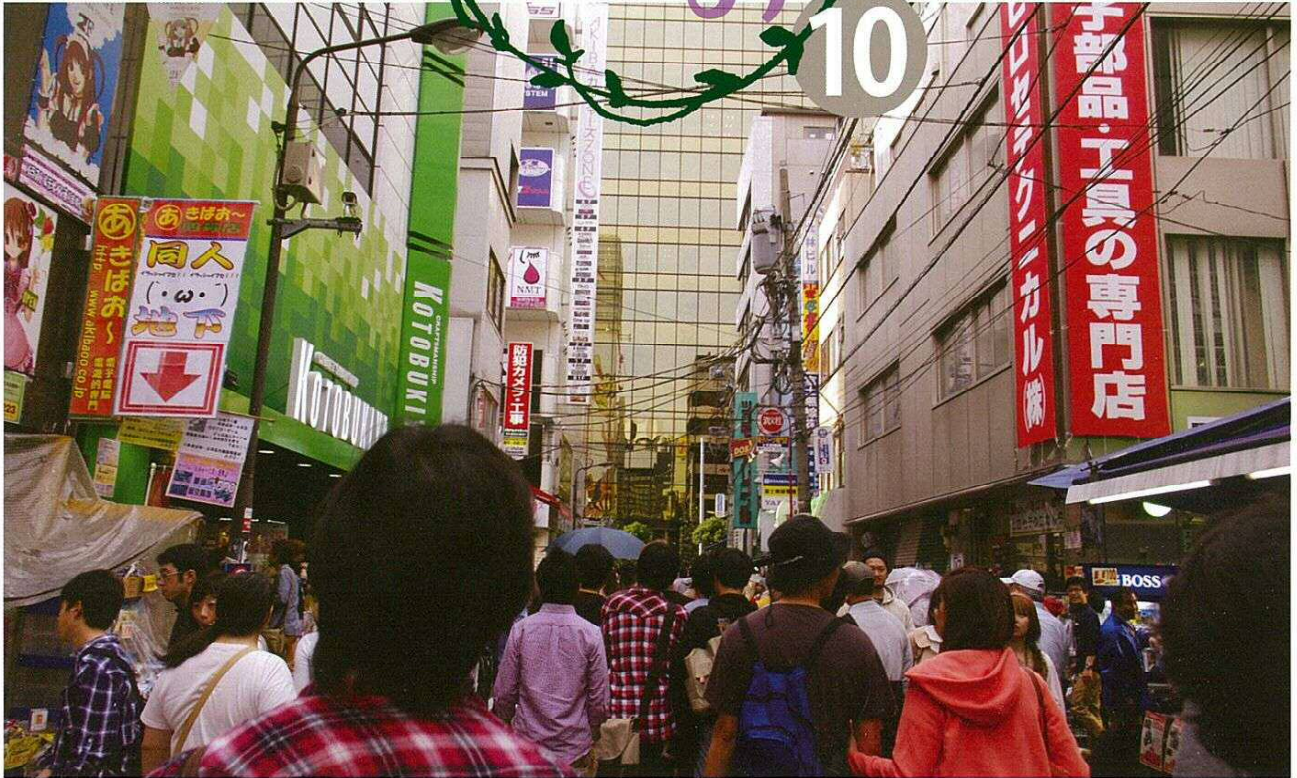
南無阿弥陀仏は
私のいのち



平成 24 年
10 月号

NO.
417

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
<http://saitokuji.tobihiro.jp/>
発行人 岸本 秀一
印刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



便利を貪る

近頃、携帯電話のスマートフォンが人気である。携帯電話といえば、名前の通り携帯できる電話であったのだが、色々な機能が付き、スマートフォンになると小さなパソコンのようなもので、大変便利である。携帯電話だけでなく、時代と共に様々な物が便利になっている。

しかし、物が便利になると人間の経験が貧しくなる、という話を聞いたことがある。進歩発展をして生活が豊かになると、自分が動かなくても、機械が代わりに動いてくれる。そうすると人間が実際に目で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、舌で味わい、身体で触れるというような経験が貧しくなる。外食に行くとしても、インターネットで店を調べて行くことが多い。自分の足で探すという経験をしなくなったのもその一つであろう。

私たちは物が便利になったことで暫くは満足するが、それに慣れるとすぐにより便利な物を求めるようになる。それはこの頃のことではなく、人間の歴史の中で、より便利な物を求めてきたからであろう。

人間の飽くなき欲望を『仏説無量寿経』では貪欲と教えるが、貪り求める、心は次から次へと起こり、満足を得るということはないのである。満足を得られないことを知っても、また求めている自分がある。「煩惱具足の凡夫」とは、そんな我々の姿を言い当てている言葉である。

落語家の醍醐味

三遊亭 美^みるくさん



今回は現在落語家で、二つ目として活躍されています、三遊亭美^みるくさんにお話を伺いました。

◆落語家になつたきっかけ

私は以前ITの会社に勤めていたんですが、挨拶をしないのが当たり前であつたり、人のためにやったことを、自分の利益にならないのに馬鹿みたい、だと言われたりするような環境にギャップを感じるようになりました。

そんなときに友達から、気分転換に何か古典的なものに触れると、気持ちが悪くなるんじゃないと、落語に誘われたんです。

それまでは落語なんてつまらない話なんだろうなと思つていたんですが、すごく楽しかつたんですよ。それで頻繁に行くようになって、うちのお師匠(三遊亭歌^か多^た師匠)の落語を聞いたとき、すごくかっこよくて、「女の人も落語をするんだ。あの師匠のそばにいたら、ああいうふうになれるのかな」と思つて、落語家になろうと思いました。

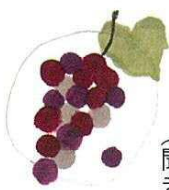
◆一肌脱ぐ

私の所属している協会は約二百人いるんですが、それぞれの師匠の癖やこだわりを全て覚えなければいけないんです。さらに知らない落語がないように、空いている時間に全部覚えたり、とにかく毎日が勉強です。

でも、いろんな場所に行かせていただいて、師匠方やいろいろな人と出会えることはとても嬉しいことです。

私は人と関わるのがすごく好きなんです。学生ときは、いろんな人と関わりあうことができたんですが、その関わりも社会に出ると希薄になってしまいました。

ところが落語の世界は、自分の利益に関係なくても、誰かのために一肌脱いでやるといふ、人との関わりをととても大事にしている世界なんです。それが落語家の醍醐味じゃないかなと私は思います。



(聞き手 蓮井 邦宗)



「供養」

「供養」という言葉は、世代を問わず使われている言葉です。

「先祖供養」、「永代供養」、「水子供養」等、様々です。一般的な供養には、「どうか安らかに眠り下さい」、「どうか祟りませんように」というような思いが込められているようです。

しかし、真宗では供養をそのようには受け取りません。故人は、「生老病死」という苦悩の一生涯を、身をもって表して下さったのです。つまり、私達の思い通りにならない「いのち」を、私達が今生きているのだと知らせて下さっているのです。亡き人からの喚びかけを、聞いていく大切な機会が、葬儀や法事でありませう。

故人の私達にかけた願いを問い訪ねていくとき、寧ろ私が亡くなった人から願われ供養されていると感じるのです。

(大橋 伊知郎 記)

人間の生活をまると見通した阿彌陀仏が、無数の仏とつながって、すべての人をたすけんと誓われたのが、南無阿彌陀仏の教え、「本願名号正定業」でありました。その誓いを、さらに徹底しようとして、誓われたのが、「至心信樂の願」、すなわち「たい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覚を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く」という第十八願であります。

「我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん」とは、阿彌陀仏の国に生まれたいと欲うて、南無阿彌陀仏と称えよといわれるのです。そこには、私たちが想定する世界には、救いがないという阿彌陀仏の眼があります。それで、救いのないことを知らせようとして、「唯五逆と正法を誹謗せんをば除く」といわれるのです。五逆とは、人倫や仏道に逆らう罪で、父を殺す、母を殺す、修行者を殺す、仏身を傷つける、教団を破壊するの五つですが、身とする殺生・偷盗・邪淫、口でする妄語・綺語・悪口・両舌、心で思う貪欲・瞋恚・愚癡の十悪を入れることもあります。たまに不殺生を

守つても、「ゴキブリを殺したいけど白い壁」というような私は、十悪のただ中にいるのです。

親鸞聖人は、お手紙で「善知識をおろかにおもい、師をそしめるものをば、謗法のものともうすなり。親を



そしめるものをば、五逆のものともうすなり(『親鸞聖人御消息集』下)とまでいわれますから、本願から除かれる五逆と誹謗正法の内容をわが身にあてはめれば、われらに救われ

る可能性は一つもありません。それで、聖人はここに唯だ除くといわれたのは、「五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめて、十方一切の衆生みなもれず往

松井憲一
正信偈の話⑭
至心信樂願為因
(至心信樂の願を因とす。)

生すべし、としらせんとなり。(『尊号真像銘文』)と頌解されます。つまり、唯だ除くという言葉には、支え合って生きているにもかかわらず、そのことに背いて本當の自分になれずにいることに気づかせ、共に生きていける阿彌陀仏の国に往かしめようとする深い願いが秘められていたのです。

この阿彌陀仏の願いが、はじめて私に響いて、仏の国に生まれる者になろうと「念仏もうさんとおもいたつところのおこる(『歎異抄』)」のが、信心であります。それが、「心を至し信樂して(真実の

心で深く信ずる)」ということであるといわれます。しかし、己よければすべてよしという濁悪邪見にとつぷりつかり、ご縁次第で何をするかわからない身を生きるわれらに、真実や清浄な心の相続はできません。

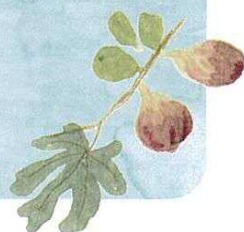
それで、「この至心信樂は、すなわち十方の衆生をしてわが真実なる誓願を信樂すべしとすすめたまえる御ちかひの至心信樂なり。凡夫自力のころにはあらず(『尊号真像銘文』)といわれて、阿彌陀仏の「至心信樂の願を因」として、清浄な信心がおこるといわれます。わたしたちの信心は、何かを当てにして、思うようにしてくださいと祈る依頼心ですから、「凡夫自力のころにはあらず」と念を押されるのです。

こうして、南無阿彌陀仏の信心は、「至心信樂の願」に呼び覚まされておこる心ですから、私におこる心であつても、私がおこす心ではありません。それで親鸞聖人は、「専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ。(『教行信証』)と、南無阿彌陀仏は、奉えるものであり、「如来よりたまわりたる信心(『歎異抄』)は、崇めるべきとただかれました。

山門の言葉

諸の庶類の 為に
請せざる 友と作る

『大無量寿経』



以前、「友達はいないけど本当の友達がいらないんだ」という相談を受けたことがある。今回の言葉に触れるまでなんの疑問もなかったのが「本当の友達」という言葉。インターネット上だけの繋がりも友達の数に入れてるような時代、いくら数が増えても問題は「本当の友達」ということなのであろう。しかし本当の友達ということも、何をもって「本当」といつているのか分からない。何でも話せる人か、はたまた長時間一緒にいてくれる人か、自分の性格やクセを誰よりも知っている人か。

しかしいずれにしても突き詰めていくと自分の都合に合う人になつてはいないだろうか。その中で友達選びをしてきたように思う。

仏法の世界の「友」とは、自分の都合や好みをどこまでも庶い、その結果、愚痴や妬みに沈んでいることに目を覚まさせて下さる存在である。私の個人的な都合を破り、愚かな我

が身を照らし出して下さる大切な存在を「友」と教えられる。

実はそれこそが阿弥陀如来の、我が身に目覚めてほしいという願いであったと気付かされる時、不都合を排除することはかりに目を奪われ友とならんという仏の心を無視してきた事実に出遇う。仏の心を知らず知らず、踏みに行ってきたのではないだろうか。

「請せざる友と作る」という言葉との出遇いは、踏みに行ってきた事実に気が付いた深い懺悔と、同時にはじめて友の関係が開かれた感動を生むのであろう。

仏語を聞く身となるならば自ずと友の世界は広がり深まり、新たに関係を開いてくるのではないだろうか。それはたとえ先立つた方であっても、その方の言葉や生き様が思い起こされ、考えさせられた時、友の世界が無限に開かれるのではないだろうか。仏法の世界の友は目の前にいる人に止まらない。

(山崎 哲記)

おつとめ 經典①

真宗では「浄土三部経」(仏説無量寿経・仏説観無量寿経・仏説阿弥陀経)を正依の經典とし、葬儀や法事などで読経しています。

また、朝夕にお勤めをする『正信偈』は親鸞聖人が作られたものですが、『仏説無量寿経』を依りどころとして南無阿弥陀仏のいわれがあきらかにされています。

經典は釈尊の説法が内容ですが、釈尊が直接、筆を執られたものではありません。ほとんどは「我聞如是」あるいは「如是我聞」で始まるのは、説法の会座にいた仏弟子たちが「私はこのように聞きました」と深く頷かれたことの集大成であることの意味します。

つまり、經典とは私が仏になる(自己に目覚める)道を歩むために学ぶ教えなのです。仏法の真理に目覚め、苦悩の人生を生き抜いて行かれた諸仏からのよびかけが言葉となって編纂されたものが經典なのです。

(木村 専正記)

掲示 板

平成24年 10月

6日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習

7日(日) 午後2時 中央ブロック会総会・間法会
(西徳寺)

13日(土) 午後6時 同行会「正信偈の教え」に聞く
法話 山崎 哲

16日(火) 午後7時 仏教青年会座談会

18日(木) 午後1時半 教行信証「信巻」に聞く
講師 宗 正元師

20日(土) 午後1時半 定例間法会

午後3時半 混声合唱団「エコー」練習

21日(日) 午後2時 城東ブロック会間法会(小岩区民館)

24日(水) 午後1時 婦人会間法会 本山リーフレットに聞く
「猶存在耶 ～まだ、生きているのか～」

27日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習

午後6時 同行会「正信偈の教え」に聞く
法話 大橋 伊知郎

28日(日) 午後2時 城南ブロック会間法会
(三茶しゃれなあと)

えこお志お礼

ご浄財を頂戴いたしましてありがとうございます。
ご芳名の掲載をもってお礼とさせていただきます。

足立区	松宮 成直 様
習志野市	初田 節 様
浦安市	窪澤 仁 様
北区	小山 幹夫 様
葛飾区	宮崎 秀夫 様
逗子市	西村 千工 様

日 誌

8月25日 混声合唱団「エコー」練習

8月26日 青年会主催バーベキュー大会
(参加者115名)

8月27日・28日 宗祖忌

9月1日 評議員定例役員会

9月3日～7日 本山・第十次間法推進員養成研修会
(山崎・大橋参加)

9月7日・8日 中興忌

9月8日 混声合唱団「エコー」練習
同行会 「正信偈の教え」に聞く
法話 木村主任

9月11日 仏教青年会『歎異抄』に聞く
講師 宗 正元師

9月12日 婦人会間法会 本山リーフレットに聞く
「老いを楽しむ」

9月13日 責任役員会・総代会

9月15日 定例間法会
混声合唱団「エコー」練習

お墓のはなし

「墓地継承」

お墓の継承について疑問や不安を抱えておられる方は多いのではないのでしょうか。通常は子供や配偶者が継承していきますが、それが出来ないケースが増えております。西徳寺では平成四年より墓地継承者と「墓地使用契約書・壇信徒契約書」を取り交わしておりますが、その第六条には

墓地使用权の相続は墓地使用者の二親等までを限度とする。ただし西徳寺に於いて止むを得ない事情を認め
た時は条件によりこの限りではない。

と謳っております。ここでの二親等とは父母・子供・配偶者・祖父母・兄弟姉妹・孫などの親族となります。もし通常の継承が難しい時は、「継承者は西徳寺の壇信徒になつていただく」という原則の下、まずお身内でお話されることをお勧め致します。

いずれにしましても事情が多様多様に渡っておりますのでお気軽に御相談していただき、最善の方法を共に考えていきたいと思っております。

(山崎 哲 記)

報恩講ご案内

親鸞聖人御往生の後、その御命日に、本願念仏の教えに出遇えた喜びを、報恩講という形で、真宗門徒は勤めてまいりました。西徳寺におきましても、一年のうち一番大事な法要として毎年皆様とともに勤めしております。

本年も下記の通り執り行いますので、ご家族お誘いの上お来しくさせていただきますよう、ご案内申し上げます。

親鸞聖人のご生涯につきましては不明なことが多いのですが、本年6月8日の朝日新聞夕刊に

親鸞（しんらん）を研究する山形大の松尾剛次（けんじ）教授（日本宗教史）と京都市埋蔵文化財研究所は8日、浄土真宗本願寺派（本山・西本願寺）の西岸寺（さいがんじ）（同市伏見区）にある塚から骨つばや人骨が見つかったと発表した。

寺によると、塚は宗祖・親鸞の妻の説がある玉日姫（たまひひめ）が埋葬されたと伝えられている。松尾教授は「骨は玉日姫である可能性が高い」と指摘する。一方、玉日姫の存在そのものを否定する宗派は静観する構えだ。



との記事が掲載されました。関東系の門流である仏光寺派や高田派では、玉日姫が親鸞聖人の最初の妻であったと伝えてきています。

今後の研究がまたれますが、結果に関わらず、それは親鸞聖人を形作ってきた背景の解明であり、親鸞聖人が開頭された本願念仏の教えこそ、今確かに頂きたいものであります。

記

日 時 平成24年11月3日(土)

午前10時30分 初日中法要
法話

午後12時 お齋

午後1時30分 大速夜法要
法話

日 時 平成24年11月4日(日)

午前10時 満日中法要
法話

午前11時30分 混声合唱団「エコー」演奏会

午後12時 お齋

午後1時30分 御満座法要
法話

布教使 滋賀県東近江市・正嚴寺住職
真宗仏光寺派 講師

福嶋 崇雄 師

※両日もお齋をご用意します。準備の都合上、10月26日(金)までに同封した葉書でお申し込み下さい。

編集後記

先月、ロンドンで開催されたパラリンピックでは、障害を持つ方々が素晴らしい競技を披露されました。不自由な身体でありながら、力の限りを尽くしてプレーする姿にとっても感動しました。

様々なハンデを背負いながら、悲願達成のために過酷なトレーニングに励んでこられました。その競技生活が人生そのものとなるアスリートの生き様に、いのちの輝きが満ち溢れているように感じました。 (主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：<http://saitokuji.tobihiro.jp/>